

ミステリアスな「青い雪」がある村。 「瀬戸ブルー」で山里を元気にする。

「瀬戸ブルー」を星空観光とつなげる

「瀬戸ブルー」という言葉を思いついた時、いける！と思いました。言葉はイメージの元になりますからね」

この村では雪が二面に青く見える日がある。そんな話を聞いたのは、昨年からはじめた「星空観光とフォトツーリズムによる地域活性化」の研究を進めていた時だった。

福井工業大学では、2016年度から、宇宙と観光・産業を結びつけて地域を活性化させようという「ふくいPHOENIXプロジェクト」を発足させた。その中で下川教授が担当するのは、福井県南越前町瀬戸地区での「星空観光」。暗くて澄んだ夜空を生かして、全国から星を見に来てもらおうという試みだ。

瀬戸地区は、約20世帯が暮らす山間の農村。最近では空き家が増え、いずれは限界集落になる可能性が高い村だ。

「今のところ目立った観光名所はないけれど、人が生活しているところには必ず面白いものがあると思います。実は地質学的に重要な場所でもあるんです。空と土に将来的なポテンシャルを感じて、ここを選びました」

昨年度は調査の年と位置づけた。地域の人たちと意見交換をしたり、研究室の学生たちを中心にフォトツーリズムを試験的に実施したりする中で、地元の人から「雪が青い」という話を聞いたのだ。

ひと冬に数回、あたり一面の雪が青くみえる日があるというのだ。昨冬、観測されたのはわずかに3回。

「幸運なことにも僕も見ることが出来ました。地元の人、昔から身近にあったから特別なものだと思っていないんですが、素晴らしい景色でした。そこで、これを星空観光に結びつけようと思ったんです。確かにある、でもいつ見られるかはわからない。これって魅力的でしょう？」

そこから、「瀬戸ブルー」をこ

の集落のブランドにという考えが浮かんだ。
地域の文化を守り伝える人を絶やしてはいけない

観光資源として「瀬戸ブルー」を成立させるためには、星空観光と結びつけた上で、宿泊や食と絡めることが必要だと考えた。冬以外の季節のことを考えると、雪以外にも「瀬戸ブルー」という概念を広げたい。

「今、ゼミの学生たちが「瀬戸ブルー」にふさわしいものを集落内で探しています。先入観なしで自由に考えて欲しいので、今のところは学生にまかせっぱなしです」

昔から村で作ってきた伝統食を、再生・継承する取り組みも始めた。作り方を覚えている高齢者に、若い世代が教えてもらい、越冬用の保存食や、糠を燃料にして米を炊く「ぬか釜」など、瀬戸に特徴的なものを掘り起こし生かしていきたいという。

「この村はわたしの代でたたもうか、と言っていた70代80代の住民の方たちが、もう一度やってみようという気持ちになってきているのがうれしんです。壊す予定だった蔵を、とっておくことにしたよって言われました。集落のポテンシャルは、そこに受け継がれてきた文化にあると思います。だから、それを守り伝える人を絶やしてはいけないんです」

今年度は、学内や関係者を中心にしたツアーを何回か行い、観光客向けのツアーに生かしていきたいと考えている。もちろん冬にも実施予定。果たして青い雪は見られるだろうか。



集落の雪景色（平常時）



廣 告



福井工業大学

Fukui University of Technology

〒910-8505 福井県福井市学園3丁目6番1号 [フリーコール]0120-291-780 [ホームページ]http://www.fukui-ut.ac.jp/